

911.3
バ
上・下

芭蕉翁及古文

上

芭蕉翁終馬の  
實記



芭蕉談花屋實記序

今ハ一むー此花舎其々後廳ハ芭蕉翁終馬の  
地ハ時々つゝあまハ本ハさあはをの空とすハ皇  
うけをねハ石ハ沉ハ人ハあハあハ元亨釋書  
曰人去境留境者也誠なるハ此言漆川ハ史  
録ハ楠正成ハ戦死を聞ハ齒を喰ハるハ涙を墮  
スハ族ハ忠義をハ人ハあハ屋の後廳芭  
蕉翁終馬ハ實記をハあハあハ拭を  
筆ハ世ハ月をハあハ人ハあハあハ  
此日記ハあハあハ傳ハあハあハ風雅の冥合

やいふは是れをいふは去来先生は篤實くく翁生  
 涯の事一実と書記しおきしゆゑなりとてく  
 蒼き車ハ心しきくくくく浪速河ハくく若  
 け草枕松島村河須大明石身ハ用申され行方  
 多し漂泊二十年は曉は夢のいふ言はくはひ  
 面影はくくくめはくく茶は後とくく朽き  
 今風は雪月ハくく翁と慕ふくくく此不  
 可思議なはくく生値遇は因と縁と感仰多く  
 一

文化七秋八月吾 東肥七隠文曉識

翁至皇二二

翁反故上 花屋日記

肥後八代 僧文曉著

浪速 花屋菴奇倒校

松風の形とめ  
 月と秋とあり  
 毎文九月廿五日  
 御守をの事そ  
 松風のま式あり  
 花屋菴を執  
 行し  
 此一札の儀  
 花屋菴の  
 可り

九月廿五日 浪定り案内くく清水浮洲の葉屋  
 務極く行り葉屋のまり需は短尺林等く打具  
 浪定りくくくくくくくくくくくくくくく

所思

此道やゆく人形くく杖のくれ 翁

峻れ富の木くくか休葛 浪定

身他十人より短の畧身他一抄と止む今度ハ  
身他十人西國へ出でしに身他一抄と何れ  
身他一抄と何れと云ふ事ありしに身他一抄と  
身他一抄と云ふ事ありしに身他一抄と云ふ事ありしに  
身他一抄と云ふ事ありしに身他一抄と云ふ事ありしに

旅懐

此社を何と云ふ事ありしに身他一抄と云ふ事ありしに  
身他一抄と云ふ事ありしに身他一抄と云ふ事ありしに  
身他一抄と云ふ事ありしに身他一抄と云ふ事ありしに  
身他一抄と云ふ事ありしに身他一抄と云ふ事ありしに  
身他一抄と云ふ事ありしに身他一抄と云ふ事ありしに

の如く書きたるは又文字古今未嘗有なり

惟然記

廿六日園女亭之山海社社味とてりて登懸の婦人  
ありし禮とてりて敬座社法とてりて貞潔閑雅の婦  
人ありて實ハ信務松坂此人とて風雅ハ何来と云ふ  
事ありし事ありしに因西惟中とて亦あり浪華あり  
のありし時惟中とて妻とて形家とて時あり風雅の名傳  
とて高し惟中とて死後江戸とてあり其角と  
て人ありし事あり

白葉の目よたあへんは産物也 翁

身仙一人身仙り別記

惟然記

廿九日芝柏亭に一集をてき約儀なり一日  
打續し重食し終しゆあきあきしく中席は  
皆る好く候

林ありと隣ハあり候と人七翁

此夜より胸腹痛はき味もあせ瀉曰く行なり  
表常好酒なりんと好ひあき茶店に胃茶湯を振し  
ききしひきと験あり晦日朝日二百と押移りし深

前巻一四

に度救きく終りかほ愁とあきけり惟然支考  
内議していつる良醫なりと指さしんち申けり  
師曰我本元者弱なりゆゆ為醫とせ侍りあき  
方いりけん我性ハ木節なりとあきあき  
木節をあきゆゆ見せ侍ん去来も一回はあき  
候とあきあきあき早く消息をおとすへい  
夫よりあき消息をあきあき大津へはけりい  
あきあき之道もあき狭くあき外も同所もあき  
人救入るあきあき保養を抱もあきあき其所  
此所とあきあきあきわらあきあきあき湯堂前南久

嵐の原を過ぎて  
又の原を下る  
あり

太良所花を仁たつと老の重座敷と借交けり  
間も好めりく亭主も物狂奇よ奇藤より法事  
後より流し其夜もよよ湯女抱せりしあり花を  
移りししひり此時十月之日也

次良兵衛記

四日車庸畦止凱升舎羅何中某師の病  
と氣をよひ之道真といふたうしと勞つしと事  
之道より同侍人ありてある

病氣を〇よひて間尋人をも憐れし度敷に  
とるる留置と紙紙をせし且仁たつとありて事

箱蓋上

和帳 舟敷入用永清の覺英  
舟敷外と道具等也

戊十月四日

次良兵衛記

次良兵衛

一机一脚

一硯一面

墨一提  
水入小刀

一烟草盆二口

火入  
灰吹

一帚二本

一夜具五流

寺具箱  
四具本錦

一枕五ツ

一膳十人前

椀箸口皿添

一竈三口

一釜鍋

一口  
三口

一火箸三

一茶瓶掛

二口

一火鉢二口

火箸法  
真瑜

一茶碗

十

一茶碗鉢

三口

一薄刃庖丁 三本  
 一藥鍋 二ツ  
 一摺鉢 一口  
 一水囊 一ツ  
 一鹽 二口  
 一行燈 二張  
 一挑灯 二張小  
 一茶罐 一口  
 一研木 一本  
 一炭斗 一ツ  
 一油德利 一ツ  
 一手水鹽 二口  
 一縣行燈 二張

右  
 一白米 一斗  
 一醬油 一升  
 一味噌 一升  
 一薪 拾束

一炭 一俵  
 一紙 一束  
 一鹽 一升  
 一油 一升  
 一雜紙 一束

右  
 一燈敷料 三歩二米 相渡  
 右 仁右衛門一斗 五取書五置

飛節使中 年若師一世 ねむりか 悪  
 寧寧 寧寧 起居不穩以 之道不 精也  
 以故以 不自由多 存計 以以 堂南 久堂

所於全仁在之重方也壽壽采極之仁一  
借文之道謹判之先寓居之定以之今  
別之四等分少元以極解之豈若味中  
以之早之本節品極解也之文之  
此節之陳則本節之別章也之此快之  
貴雅之義早之由下之相待之本節之  
以極之存法之由也之之不一

十月二日

惟然

支考

古來換

翁古上七

於之別家也之本節之由極之存也

今明之快相也之存之老師之事也  
泄瀉之常味之儀之一室夜中二十餘度  
通字是八江松園女亭之蘭之由也  
故之相考以一板之中之堂之返寸之如之  
胡之在極又通之刺度之三十餘度其始  
之道之也之極之也之也此快之也之本節  
同伴之急之由下之相待之由之也之所也  
仁在之也壽早之也入之也之也



十月之夜子ノ時

惟此

古来秋

わくたけしむるにそよ外行もくもあし事  
くちり本落たるよふく秋の秋ゆは信  
し常花節の毎く幸羅漢寺く中子信  
越ゆく切林秋をくくあまを方角  
幸(原も)らくは信をくく

三日廿七行但直取之て幸是る秋ゆくく事  
は二日朝ゆゆ之くゆ居く其夜を直くおを  
休る

猶重八

中へ己の時ありし夫へ船より軒あはは  
ハ文の時ありしと直く病府はありたる  
姑くは直くはありたるハハのもの  
國に因一人ハ直く親の思ひ給りハ家老  
わは直くはありたるハハの子ハハハハ  
討文汝ハ骨肉とをハハハハハハハハ  
日ハハハハハハハハハハハハハハハハ  
葉ハハハハハハハハハハハハハハハハ  
に直くハハハハハハハハハハハハハハ  
去来もわくく於咽せく暫くハハハハハ

ふるむのちかたにせむ。其意をいかにかきし  
書けしはよきことかきし事かきし。しほむ志却不仕と  
般行れ洞むむやむら候書業れ効験むら  
とくを来又消息ととらむ事形御便に本節  
こつらひ

支考記

曰る松子の時退つていふ本節ありて二日出の  
商人は消息を頼るなり故大付を五の時と  
一番舟より一と短日の冬に諸子の云々  
そつらひ

方逆逸湯と調合

支考記

曰る朝本節中さきより朝解人參半兩通候  
町体見ふらむ包魚十二分をわかし之道  
方より世活し身洗濯老女より肺れい衣其  
外き衣れ衣器をさき園女より菓子英水仙と  
送る支考惟然い抱次五湯中より何より之道  
心よりいさあ合器吞舟よりある接磨を中  
子より今日二十粒をわかし夜より一市販名後草  
あり

五日朝丈草乙別正秀きなると氣帯る重谷  
まし時作のゆきや師討て思きの氣けり朝丈改  
き清てはま清系昼のゆき夜着蒲団又く五流  
茶き汁 香油二升塩を升味噌二升薪二  
十束炭二十束目煎茶の束より今日師食した  
るは湯素麵二箸より夜中すゝめは五十度  
におし

次良長清記

六日て氣法晴きし朝の食入麩二箸茶

終宵寐入きまを以暫く睡眠したよ目と  
よとす来きりくめしあ先は野の方す  
まけり大井川は吟行せし

大堰川波よりけり夏月翁

此白あり多又さすねと大井川は夏すれい  
かきへきりとおひわたり清瀧

清瀧や波よりけり春松葉翁

少作りし車柄きさきりしと同葉りし人のい  
もつりし大井川の白に捨る人なはまきり  
あうりし頃白園女は極きり

白菊は目よたてては塵世(一) 菊

中吟一をう是又回葉は似あふ白は道筋は  
そま故おれ二句と一向は接ふうとあ白菊は白を秋  
しおま侍んとおりのはうまいつんを来涙と  
名匠はくく名匠惜と道と重したよ有と  
白一章よととあ千辛万苦ととよ病腦の  
中は清骨折風雅は陰情ととあは眼あ  
りの何老と此句を回葉回葉とと人き恐ま  
白を回葉回葉はくくこのは眼人  
其のあは此句と京情別と伝はあ白意と

菊五五十一

対と三白やも別ありかふうあは我は白は意  
を月よとあふは姿をひ青苔日厚自無  
塵はあは隠者け高儀をわある語今園  
女ういさうとああ陌上柔花凋あるとわある  
ゆはあはあは意も妙なり語も妙なり世人は白  
をるの園は清節をあはんはあはあは語と  
左太仲り必非絲與竹山水有清音とあは絶  
唱もあはあは園と二丈よあはあは真潔や大升  
清能は絶景と二句はあはあはあはあはあは  
あはあはあはあはあはあはあはあはあは

去来記

方初より不おを此版乳のり日やうにめぬり染  
方逆逸湯に加減し入麩を好ししと一園女を足  
舞とく菓子等贈さうは次第に清取討く之  
道に贈る鬼貫ある去来應對しと選ひ園  
女可中渭川ある去来考會新と終日菜と  
めり終日帯るおよりあ晴る夜よ入ぬ人音  
もあつらひはきく灯けりしと人々伽しあわさけき  
いし別正秀ホ去来よ申けり今乃師り泉下  
け去るをせしきと此は此風時いふなり行侍ん

篇卷上三

去来然しとあ居ありしと秀もて去来をいかにし  
ゆ名二日け消息届し故きうきありきと人々  
もこおありしとあはあふ今松園静なり今今れ  
騒よおりしとあはは使信おつらう滅はれ沈潜を  
あししとあつらんしとあ静し松上よ何ひらとあ機  
娘ととらうしと申けりお改改と清よきとあおお  
さきと息つきたしとあめのはらと沈潜し変化にふ  
たうりしとあきと真行草けりしとあきとあきと  
とらうしと千変萬化寸あけりしとあきとあきと  
あきとあきとあきとあきとあきとあきとあきと

杜子美の老とおのひまの西上人の道心と一たひ  
調の業平の高儀とありていふも我れ世あり  
とあつていふは他は化せし事よむ言ふ事  
らぬまゝの心とて言ふは春  
舟の口を潤とて又薬とてあつてあつたま  
各筆とていふあつて書く

惟然記

八日と氣映晴清不食より京は士ある信徳  
より路息りて歩病跡を同く回遊には菊とて  
使來侍人の擲はけ同く今度け清不勞平復と

折るをんとあ住吉大明神に連中とて人をと  
へしと去來中おとまひま各あつてとて通は  
多清ハ電清とあ社務林桑女方に祝詞をたの  
厚く納めおとあ春詠

奉納

落つてやうと水とあ神あつて 木草  
初雪とわとあひひ佐たけ文 正秀  
啼くと鴨れとあや 詠とあひ 文草  
起とあし聲とあつて湯婆と 支考  
あ仙と使とつとあ条とあま 香舟

居りて... 惟然  
 神は... 霜の菊  
 去来  
 大勢... 脈と  
 根元脾胃  
 逆逸湯

篇五上五

ありて又加減... 薬力  
 師曰... 虎口龍鱗  
 かく悟道... 神を  
 支考乙... 病床  
 鷗名... 宗師

此辭世にまうりやと世のつものもつるへあま  
 一白を殊したるり諸門人此望はぬへ師は  
 まけの貴いひは此辭世今日此貴いひあま此辭  
 世我生涯を捨一白一白とあ此辭世のま  
 け一若我辭世のまと同人のあ此年頃ひ  
 捨おま一白つまのまも此辭世のまのま  
 諸法從來常示寂滅相あま是釋尊此辭  
 世のま一代此佛教此二白と外はる古此  
 世のまのま此音此白と我一風と與せると初て  
 辭世のま其後百千此白と吐此言のま

あまのりつあ白く辭世のまのまのま  
 と此言のま清う傍りりつを洞のまのま  
 の語のまのま此語實のまの微妙爾此凡人  
 らまのまのま

支考記

おまのまのま此野のあ有るまの標と贈りまの  
 消息のまのま今もまの伊賀のまの音行のまのま  
 中候のまのま飛脚のまのまのまのまのまのま  
 師のまのま我遠遊のまのまのまのまのまのま  
 里の花此のまのまのまのまのまのまのまのま



やい我邊より今大病をおうる一類中れと  
りた時よまふれ言ふも思ひたし今度  
大切におもふも汝はあまのひの師に  
爲れ汝きあゝ各感念の度數十十後におよ  
九日諸子れ取らむしあふれ哀愁又松果  
白くは垢つきる不淨あるを脱するし衣言を  
うへたりせ中師曰我坐地波濤れほの草を  
お森塊と槍と多終とやふし身れから美  
しに傳はるよふも未來さくは友とらうんく

惟然記

しく鬼録さうじと受生れ本望より本草を来  
と召昨夜目れあふさう不計業入多吞舟に  
半せきり各録したん

病多あま枯野をかけと  
枯せとめくるまふ心もつらうさあまを  
辞せあふれ辞せあふれ病中  
けり多繁保く保生れれ一大事とあふれ  
わうううま生涯ぬう一風流さふん  
是も毒執れ一もつあへけん今ふいさ  
をたあふれ月胡雲暮雨れ男も地う山水

錦鳥けしきもさあつらひ心身風雅あり  
さうまかゝる河魚は患よつとせしむる今  
とけるもろくに其風神は名章を唱へ給ふ事  
法門業はさうま他門は同を未代は龜鑑あり  
少海をと茶洞を流る眼ありの是をといは魂成  
飛さじ耳のりもの是をさうまは毛髪をけりさうま  
動じ列坐せり而も感慨悲想しあ慟絶し  
多齋なり是師翁一代遺教経より此日とて  
授けり抄後人きりて度教をせり

古本記

十日初阿母を師おめりしを度教をきり  
ひし心腹をきりて打ちもさうまのりさうまを  
さうまのりさうまのり本師此日芍薬湯をり諸子  
打ちを食事をすめりてせしむるすきたるを以  
梨宴をけりたさうま本師かく割けきと頻に  
にせしたさうまのりさうまをけりて一に  
味ひさうまのりさうま本師之脾胃うるを以死  
期らさうまのりさうま申せ下刻さうまのりさうま  
つきたさうまのり一人も食はるるのり

惟然記

十百朝さくしつ雨のせりしうもれく東武は其  
角さくはさく東武は誰彼同伴の事宮内  
序和為紀州と打ちく泉の事と信義の打ち  
しつはさく師は常におもひつる事と此  
となつてさく漸にさつしきりてさく病はま  
わく事は骨連立し終ひて終を見せしめて且  
愁ひ目も流るる師も見せしめてさく  
唯く洞くさく其角もさくさくさくさく  
ありとと丈夫を来支考其れは尻次は問り  
括りて病性始終とさく此夜さくさく

さくおひさく事さくさくさくさくさく  
さくさく師さくさくさくさくさくさく  
娘さくさくさくさくさくさくさくさく  
すさくさくさくさくさくさくさくさく  
さくさくさくさくさくさくさくさく  
つさくさくさくさく

病中此の事さくさくさくさくさく

去来曰趣向と他よりさくさくさくさく  
さくさくさくさくさくさくさくさく  
さくさくさくさくさくさくさくさく  
さくさくさくさくさくさくさくさく



まゝと書くつゝは汝は同の道にゆくを以て考  
もつひのいひやうも法子は其の面目とて  
印も行く惟然と非じし我は白のつらき  
といひし  
あつたあつたあつたあつたあつたあつた  
支考  
支考  
支考

これ三つ磨き  
その根は尾花系  
に

白毛とて葉が  
うすかな夜物  
さうさうさう  
とあり

寇とて葉飯

本節

皆子なり

乙州

うすさう菜けりとのさうりれ

本草

本草

吹井とて鶴とてまの心初とて 其角

一々惟然と書くは其の師本草とて今一度と  
のうさうさうさうさうさうさうさうさう  
細き面白くさうさうさうさうさうさう  
ありつゝさうさうさうさうさうさうさう  
節一人然といふは其の角の中  
本節ら病を除中けりてさうさうさう  
かゝる飯の食はさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさうさう

父おれこゝろをいひ暫く不調一人もいへり  
 一平八さのしや、いつく又案証よかりたし左  
 舎羅吞舟うゝり、いひ次言を清いしよすあゝを  
 分抱し程多くねのけも六十二日あり、身も不調  
 了行ひしへきやれ、薄子も襖もわりとるゝ其角  
 ちけな本草を是へし、あゝ向よん給ひ、採とるゝ  
 と胆尺あゝまゝあゝあゝ行水と診、たゝよ本節  
 頻りに割し、けをいひ、あゝのそみ、行よ、あゝ  
 こゝとゆひ湯といへるゝあゝをいひ、あゝをいひ、  
 ちゝあ本草の醫術とるゝあゝあゝあゝあゝあゝ

前巻五上廿六

又謝し給ひ、ね二人、ねを近くめさ、し州正秀  
 と左、あゝ支考、惟然とあゝをいひ、あゝあゝあゝあゝ  
 あゝあゝと送、あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
 人、奇異れお、いひとあゝいひ、伊賀れ送、あゝあゝ  
 う、認め、あゝいひ外、京江戸美濃尾張、あゝあゝ  
 に送、あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
 あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
 次、あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
 あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
 通、あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

清心斎霜天可憐の母女...  
雪井此余... 侍る彼... 数年此薪  
氷け労働... 我... 足持...  
諸國... 言... 可... たる  
終... 属... 曠... 時... 元禄七甲戌十月

十二百申此中刻... 昂刻... 其角... 之道... 京へ荷物... 頃夜... 其... 多... 京橋... 根...

通りよかりと云ふ事いふ事いふ事二十二年己未時  
より大はれし州の室に入ると云ふ事いふ事いふ事  
見よと先きと云ふ事いふ事いふ事掃除しき  
めは浴衣用意と云ふ事は浴衣の道吞舟法を講  
じ置かれしと云ふ事いふ事いふ事大草法師の  
けは清法衣淨衣等、智月とし州の妻縁を  
淨衣白衣と云ふ事いふ事いふ事いふ事いふ事  
いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事  
いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事  
衣も兼及れ膝と云ふ事いふ事いふ事送葬八十四

日と定て彼是口及みかろいふ事

大坂府金と云ふ考惟然と云ふ事は林羅羅  
寺に僧伊勢と云ふ用と云ふ事いふ事いふ事  
せし事六是事いと頼つらけと云ふ事いふ事  
日と定て瀬渡と云ふ事いふ事いふ事いふ事  
高き階と云ふ事いふ事朝伊賀と云ふ事いふ事  
同つと云ふ事いふ事いふ事いふ事いふ事  
いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事  
日と定てと云ふ事いふ事いふ事いふ事





はくまのけり

土著物語  
年感

十二の量より体人を出舟一たり臥高昌を揮芝  
北玄曲翠等ハを扱何まよし多行遠しといふ如  
らむ相ゆく大坂の忌出に花屋よとてててて法  
子清骸をとりたりとめけり流しぬと家とを  
志ま又十二の量魚船は大坂へ引入しを扱而  
此刻はあしつくと扱も頭は大けり物法

昌房抄法

義仲寺真愚上人任職の公導師より三井寺

翁堂上三

常住院より母子三人のわが読經念佛ありし  
入櫃ハ其夜而此刻より諸門人通扱し多伊賀  
此一た右をき付扱入りも左右外に吉原其角  
乙州等評議し多茶式といふ十四日此西上別  
と相親心昼けりしるを集社する人いそ處けり  
扱しひきえり人扱凡三百人餘ありしる近御し  
り多あつ老若男女多し多と悲しむ時し小春  
けりし多あつる天気晴るる月清朗し七湖  
水の面よかやと渡り名りし粟津はす川よ吹起  
るに常は嵐しおりのまき月におり流るり此

露のさきさきつゆのふりまきとちもぬる何のりくは  
りのかききむ矢橋は健けしむ印さも熱人け  
事より胸よそり洞とほし

支考記

引導香語

雪月魁魁風花精神等用一白驚  
動人天嗚呼奇哉芭蕉妙哉芭蕉  
萬里白雲一輪明月五十一年一  
字不説

冬捻香

艾草 其角 去毒 李由 曲翠 正秀  
木節 乙洲 臥高 惟然 昌房 探竺  
泥足 之道 芝栢 北玄 尚白 土芳  
卓袋 許六 丹野 風國 野童 遊九  
野明 角上 胡故 藎葉 靈椿 素聲  
田鳥 萬里 識々 這萃 荒雅 楚江  
木枝 扑吹 臭光 支考

諸國代香不記

右は近江守中八中ノ及々々京大阪美濃

尾張伊勢よりあつくりと京つとてなをわたり  
諸國此人の三世値遇け縁とて縁こひ我もく  
や香子向きふ其教何百人といふ教も此境  
内獲けまふ表も入をまふ人を裏へもあつちうに  
あつちひ並田は刈取らるるとも此を焼香人々  
とて多裏へもあつちうて強うもまふれ  
く葬埋をのりけらるれば此はあつちうにけらるる  
遺命は通里本曾殿はたのりて埋葬しなり  
けり

十六日 寺末其角らも膳所大付の人の朝庭

後世

詣り多先くあつちうさつりあつちう卵塔を  
と塚けらるるは年ありたる柳のをりけり  
湯名は形見とあつちう枯れ色草を一本兼こ  
紗のり茶は木の今をまふるる花もあつちう  
柿もあつちう竹もあつちう垣田ひまわりもあつちう  
日れりも廣くもあつちうと生前もあつちう名豊草草原は  
浪もあつちう其徳美若れ絶頂もあつちう人丸赤人  
れりもあつちうあつちうあつちうあつちうあつちう  
一人あつちう

此一抽再形存什物

多品 雪其意  
雜其 替換  
十五 極堆  
生處 半殘  
土芳

清心之氣 候時氣 一息之可也  
是又高之候 永清年 比高之清心  
人跡之可也 至冬之一年 可也  
市浦之可也 及意者 初時之可也  
在形 中之十之反 其之可也  
其之可也 刀落之可也

十月廿

松者 立

松尾中吉之松

新藏之松 骨之好也

扇及故上 畢

五色雀箱及木文

下

歸月抄  
高持



翁及故下 花屋日記

十六日乙州高集會一多義仲寺住持  
其办僧徒之禮物并送物木の沙結了也

昨夜を大に以苦勞及相しるを先師  
少進之通心進物支く配分仕交を办  
寺納少之義中候交且亦伊賀が一向  
及事も守之為るる事なれ然る人  
之申及之付拙史一人之名目が得ぬ

故多通名子加入中夏是西之義及今法合  
度又曰法者一古之也東法國建中近  
後子之申於此蓋亦以此將能治百  
約與以法友付之志涉經焉一記一章  
貴雅涉中及友右條之可法者只  
今之出坐之可法者而中上止  
也

十月十日

去來

一生南英雅

墨草一

今中物相續也... 自寺納之... 曲翠子始... 何則... 墨草一



終焉記 枯尾集

修了集の記  
兼談の篇目之  
て刻す

免るる。以是物。寺納。事。主人法。子。何。紙。面。一。其。宗。初。是。世。出。

十日十日

其角

公羽五下二

一本

古来英

十七日乙卯亭

一 煮豆上人 全一兩

一 湯餅茶料 日一兩

一 湯餅茶料 日一兩

一 湯餅湯料 日百匹

一 湯餅子銀子 日百匹

一 三井寺常任住持子三人 日二百匹

家来三人 銀三兩

浄土物

一 出山佛一躰

御長一寸一丁

今長崎より

一 鐵如意一本

佛頂禪師より附典長押延て凡一尺九寸位頭其葉形、金箔木曾寺より文草に附典

一 觀音經

小本一部

一 紙縷袈裟

佛頂禪師より附典

一 被風

一 銅鉢

一口

一 木硯

櫻木より旅硯

一 古今集序註一部

一 百人一首一部

一 新式一部

一 奥之細道一部

一 浄笠一蓋

一 管蓑一被

一 御杖一本

惟此に附与る

一りの今攝

堀井山の藤風

右紙縷袈裟より以下七品八兼く惟此に附与る  
以約修ししに故也惟此に附与る

一 浄頭陀

中杜子美詩集山家集外に後猿蓑と影あり  
奇仙三巻卷白四五吟裡外に浄手持の及故不入別

小紙に包くる布裂五寸又六寸許上包に狭神布と  
を二法風と又外に和歌の古短尺二枚松嶋蛸沼の  
二枚

け狭神布性信  
の画ハ今文曉う殺  
飛ハ

右の中紙に包くる五寸又六寸の布裂若菜松  
嶋蛸沼の画も湯支母をなすの形見  
下拵に浮舟をとり板を帯け生涯室  
物に仕交る。

古来

け百納松尾和  
集ハあり

十の納義仲寺止らる之伽羅百納卷尾和  
鳥羽の文甚松風妙祝写の末祝建元甲十三人

箱下 四

終一喜人 乃其公益湯平安之  
恭和公の湯平安之末祝を  
終一喜師 終大坂の大病に  
然も中平に切湯保書之  
故紙面を平安之末祝を  
有袋平安の加湯保書之末祝  
為お竹 吉十二百終に  
い候少平之故之末祝  
と平安之末祝を  
湯平安之末祝を

有別十字... 夜於本曾古埋藥仕。  
委曲之旨... 出昔年... 爲... 上... 法  
子... 也。

一... 封... 一... 師... 爲... 以... 近... 化... 之... 以... 德  
... 經... 以... 中... 之... 旨... 上... 年... 之... 旨... 封... 誠  
... 志... 之... 旨... 上... 年... 之... 旨... 封... 誠  
... 志... 之... 旨... 上... 年... 之... 旨... 封... 誠

一... 寺... 集... 之... 旨... 上... 年... 之... 旨... 封... 誠  
... 後... 之... 旨... 上... 年... 之... 旨... 封... 誠

中... 若... 之... 旨... 上... 年... 之... 旨... 封... 誠  
... 多... 計... 之... 旨... 上... 年... 之... 旨... 封... 誠  
... 名... 彈... 之... 旨... 上... 年... 之... 旨... 封... 誠  
... 何... 之... 旨... 上... 年... 之... 旨... 封... 誠  
... 法... 之... 旨... 上... 年... 之... 旨... 封... 誠  
... 中... 之... 旨... 上... 年... 之... 旨... 封... 誠  
... 也... 餘... 之... 旨... 上... 年... 之... 旨... 封... 誠

十月十九日

吉本  
角

松尾... 之... 旨... 上... 年... 之... 旨... 封... 誠

別後昨日の御借百納入を現す

一 清蓮の目録の外に左の如く抄居

り不抄給入 一 名抄給り抄肌付

清常 二番 右の如く至仁の如く一 抄居

本に贈るの外に古清衣の如く抄居

一 八大坂の如く抄居

一 抄居

一 抄居 抄居の如く抄居

抄居の如く抄居の如く抄居

抄居の如く抄居

一 清蓮の目録の外に左の如く抄居

抄居の如く抄居の如く抄居

抄居の如く抄居の如く抄居

抄居の如く抄居の如く抄居

抄居の如く抄居の如く抄居

抄居の如く抄居の如く抄居

抄居の如く抄居の如く抄居

抄居の如く抄居の如く抄居

抄居の如く抄居の如く抄居

抄居の如く抄居の如く抄居

平土若年成於人我微神致口口也  
身中亦有所為雅文以存情之程涉  
禮難中令人色甚之一所不往之境  
界之末了也其不第思能信也  
之文殊之志也持學之也係病中  
始終之友抱之夕繼冷親難之而附  
法亦先新也之而中亡也身之也  
他本之官也親難中一也月身之能也  
奇也

一自大坂而度之也滿一舟二百里涉

竹色滿十二百里之書也之由也之也  
若未而而也中之昔在而氣大如也  
為之也之故子建使志也之也子建也  
也之也之也而也之也之也之也  
也之也十七百里之朝也而也之時也  
也之也也之也也之也也之也也  
也之也也之也也之也也之也也  
也之也也之也也之也也之也也  
也之也也之也也之也也之也也  
也之也也之也也之也也之也也  
也之也也之也也之也也之也也

初瘡も老人の如きお痛湯  
九月下旬致使氣の瘡は心の腹茶の  
身に出動もして瘡力も未だ中の子結  
して法風もして瘡力も未だ中の子結  
一芭蕉も林様致意もして瘡の一打中  
打撃もして瘡力も未だ中の子結  
瘡力も未だ中の子結  
一亡者も如く候へども瘡力も未だ中の子結  
瘡力も未だ中の子結  
表向もして瘡力も未だ中の子結

言の如き格別にも不依何れも未だ  
仲も毒物もして瘡力も未だ中の子結  
一毒も子結も未だ中の子結

一毒も子結も未だ中の子結  
始終も感入もして瘡力も未だ中の子結  
仲も毒物もして瘡力も未だ中の子結  
一毒も子結も未だ中の子結  
一打撃もして瘡力も未だ中の子結

懐之致意あり外に古衣の如くもたす所なく  
はるかにたしなむる必は會の志にむかは  
候はるる事ありしに余情深敷申す候

十月廿日

相尾中左衛門

全信判

晋 其角候

向井吉右衛門候

清進中候

其後清進候乃遠に踏進申す候

痛可くはるる中一日もあらず申す  
為し申す候事あり

別紙申す事の色紙宛に申す事の抽き立  
同紙を申す事申す事申す事申す事  
飯史舟辭世を申す事申す事申す事  
おと事申す事申す事申す事申す事  
申す事申す事申す事申す事申す事  
申す事申す事申す事申す事申す事  
申す事申す事申す事申す事申す事





清田向家... 松尾半左衛門  
... 松尾半左衛門

十月二日

松尾半左衛門

義仲寺様

覽

一 清布 拾 金二百正

一 同清 仙米清 粉米料 同二百正

義仲寺 土

一 同清 桑酒料 同百正

一 清布 拾 同百正 松尾半左衛門

右

以飛札得... 桑酒料... 清布拾... 同百正... 松尾半左衛門

十月廿二日

松尾半左衛門

吉永雅文

告身ありて死に顔ありて冬雪山露沾  
此亦結玉之帛後救百之無難難故之除之

頃日古昔の年感帰郷の御中多々名  
く受ふ少給共を信前入るる人産  
中ひ先公古くは西の方未だ使すは  
名輝照分法自愛者一なるの此  
西雅文の成之字の通亡師一古  
法意前清世若くは百約首尾結集

鳥羽之甚と長  
清のつらと

之お來何甚哉満是信の然るに  
清傳可く鳥羽之又甚之を以て古は又  
甚く之申夫以可及も其季吟老人の  
亡沙の以縁の風雅傳其の種物たる  
根元之旨法字の紹也清傳成文法  
貞室季吟亡師の傳りは如新の事  
之の若亡師一代の若くは彼居るに用  
之の字の在深川の若くは其の字の  
之先年精義集撰成結信吟古の御  
深川の字清の若くは其の字の若くは

此山有古之亡師... 傳... 禪中... 風雪...

石... 大... 解... 志... 又... 拜... 傳... 獨...

る人々之形並に西段守りたる道心清  
人体に切実な事自りて人毎に母に  
たに雅相にらしき少は其の心清静  
らるる来事成るに拙志に心清静  
九之修別たふふに其の拙志に  
心清静にらしき少は其の心清静

十月廿九日

向井吉成

松尾半左衛門

判物持渡先立は官人希後之由計

箱草下由

重宝之清言始に下志をわく徳と為羽  
之又重宝に之を原家之類一色に付る如  
き人余た之其意に之志自外亡事も  
此の大切成程意清静にたし器物引  
譲り之清言始に後之志をわく徳と為羽  
然に之も自能内之類一色に付る如  
き人余た之其意に之志自外亡事も  
此の大切成程意清静にたし器物引  
譲り之清言始に後之志をわく徳と為羽  
然に之も自能内之類一色に付る如  
き人余た之其意に之志自外亡事も  
此の大切成程意清静にたし器物引  
譲り之清言始に後之志をわく徳と為羽



三歩筆反意尺寸

右身師嗣相承之印季吟翁之史

師之涉於風雲動之靈谷之山及持卷之

口頭之我官之付機初意常山後終

如件一

元祿七年甲戌十月寫 白井生外

松尾半左之門後

但三ヶ所底 二ヶ所末小指先程一ヶ所又小指

指四角之角換之也

篇反教下畢



大尾

浪華書林

心齋橋通北久太郎町

鹽屋 忠兵衛

文化七年冬十月

積翠亭尾旭林藏

